

## 平成30年度 【 学園研究費助成金＜ A ＞ 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

氏名 黒田 由彦

研究期間 平成30年度

研究課題名 観光まちづくりの構想と現実 ―持続可能性に焦点を当てて―

## 研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	黒田由彦	文化情報学部	教授
研究分担者	米田公則	文化情報学部	教授
研究分担者	阿部純一郎	文化情報学部	准教授
研究分担者	木田勇輔	文化情報学部	准教授

## 1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

観光を起爆剤としてまちづくりを進める「観光まちづくり」は、日本だけでなく、グローバルな規模で展開する、その意味ですぐれて現代的な現象である。すでに多くの成功事例が紹介され、成功を生み出す要因に関して、研究者のみならず自治体関係者など実務担当者の中で議論が積み重ねられている。しかし、成功が新たな問題を生み出す側面に関しては言及されることが少ない。実際は、観光のまちづくりに成功したが故に、意図せざる結果が生じ、まちづくりの持続可能性の足下が掘り崩される現象は、珍しいことではない。以上のような問題意識に基づき、本研究では、観光を軸としてまちづくりを行っている複数の地域を取りあげ、社会的な調査に基づき、観光まちづくりの構想と現実のギャップを持続可能性の観点から検討し、「アフター・サクセス問題」（意味は下記参照）にどう対応するべきかを考察したい。

## 2. 研究方法等 (300字程度で記述)

- (1)観光資源（自然資源 or 文化資源）、地域特性（都市 or 農村、大都市 or 中小都市）を考慮し、観光まちづくりに成功した地域を複数選定する。金沢（歴史文化資源）、小笠原（自然資源）、タイ北部地域（農村観光）、名古屋市長者街（大都市、文化資源）が現時点での候補である。
- (2)各地域において、観光まちづくりの構想と現実について、フィールド調査、とくに現地の行政や住民リーダーへの聞き取り調査を行う。
- (3)各国・各地域での現地の行政機関の政策や計画などの資料収集を行う。
- (4)得られたデータや資料を整理し、観光まちづくりの持続可能性を担保する条件は何かという観点から知見をまとめ、研究発表や論文執筆に利用可能な形に加工する。

### 3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

得られた知見と今後に向けた課題は以下の通りである。

「アフター・サクセス問題」は、「観光まちづくり」の発展段階とその地域固有の歴史によって、異なった現れ方をする。

金沢は、「観光町づくり成功真只中」というような段階。「生活と観光のジレンマ」を最初から抱え、試行錯誤してきた。「観光による成長」志向の中に生活配慮がビルトインされているように思われる。これについては、更なる検証が必要だろう。

小笠原は、「生態系保全のジレンマ」を抱えているが、Adaptive Governance が機能している。それ以前に、集客に対する抑制が働いているが、それはなぜか。歴史に由来するのか。今回の調査では、何人かの人々にインタビューし、貴重な証言を得ることができたが、更なる調査が必須である。

観光後進地である日本と比較すると、観光先進地のタイでは、「アフター・サクセス問題」が典型的に存在していることが確認できる。そもそも CBT 自体、コミュニティに恩恵をもたらさない観光化へのリアクションであり、「アフター・サクセス問題」への対応という側面があった。現在は、DBT の成功が新たな問題を生み出すという、第 2 段階の「アフター・サクセス問題」に直面している。ある意味で、タイから見て、日本は一週遅れであると言えよう。

暫定的な結論は、「アフター・サクセス問題」への対応は、当事者が何を観光まちづくりにおける成功と考えるか、観光まちづくりに関する彼らの将来構想と方法論と密接に関連している、というものである。

### 4. キーワード (本研究のキーワードを 1 以上 8 以内で記載)

①観光まちづくり	②持続可能性	③アフター・サクセス問題	Adaptive Governance
⑤生活と観光のジレンマ	⑥生態系保全のジレンマ	⑦ Community-based Tourism	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

論文：米田公則、「地域観光の可能性と課題」『椋山女学園大学研究紀要平成 30 年度・社会科学編』2019 年。

調査報告書：椋山女学園大学文化情報学部・阿部研究室編、『2018 年度小笠原諸島調査報告書：父島・旧島民の「戦争」の記憶』、2019 年 1 月。

研究発表：木田勇輔、「地域はなぜアートの夢を見るのか——都市・地域研究の視点から」、『アートと地域づくりの社会学——直島・大島・越後妻有にみる記憶と創造』書評会、2019 年 3 月 24 日、立教大学池袋キャンパス。